優秀賞

君からの贈りもの

福岡県 福岡県立小倉南高等学校一年　稲崎　珠希

　みなさんにコンプレックスはありますか。私はあります。いくつかありますが、左膝の裏のあざがそのうちの一つです。このあざは生まれつきのもので治療しない限り消えません。そんな私が経験した話です。

　このあざが他人にとっておかしいものだと気づいたのは小学生の頃でした。幼稚園に通っていた時は誰にもあざについて言われたことはありません。だから私にとっても、相手にとっても普通のことだと思っていました。小学生になって学童に通っていた私はその日、半ズボンをはいていました。席に座っていると、ある男の子が、

「おまえそこだけ日焼けしてる。」

と言って指差し、周りの友達とこちらを見てきました。とても恥ずかしかったです。その出来事以来、あざのことを前より気にするようになりました。母との会話の中でも私があざのことについて話すと、母は私を想って「治療する？」と聞いてきます。何度も悩みました。治療したらお金はかかるけれどもうあざのことを気にせずに生活できるからです。だけど私はやめました。ただ我慢すればいいというだけの話だからです。あざにはなっていますが痛くも痒くもありません。みんなが私にあの出来事のように言ってくるわけでもないし、相談にのってくれる友達も沢山いました。

　その出来事からしばらくたった日。その日は小学校の運動会でした。体操服はあしが見えてしまうので好きではなかったです。自分の順番が来るまで座って待っていたけれど後ろで座っている人にあざが見えないように手で隠しながら座っていました。私からすると癖であたりまえのことでした。すると横に座っていた子が私に、

「どうしたの。」

と話しかけてきました。その子は周りに言いふらしたりする子ではないとわかっていたのであざのことを話すと、

「お母さんから生まれた証拠じゃん。いいじゃん。私には何もないよ。」

と言ってきました。正直とても驚きました。このあざは私にしかなくて、他人からするとおかしいものと思われていると思っていました。しかし彼女はこのあざを「お母さんから生まれた証拠」というふうに言ってくれました。私はそんな考え方を一度もしたことがなかったので初めてこのあざがあって嬉しいと思えて、言葉一つでこんなにも心がすっきりするんだと感動しました。今までずっと本当はこのあざなんてすぐに消えてほしいと思っていたけれど、あざは痛くないし、それ以外の目や鼻、口、あしなどはとても健康で不自由なく暮らせていたので、私よりももっと大変な思いをして頑張っている人だっていると思い過ごしてきました。そんな考えを一瞬にして取り除いてくれたその言葉は今でも私の宝物の一つです。彼女とはすごく仲が良かったというわけではなかったので彼女が今も覚えているかわからないけれど今もとても感謝しています。

　言葉にはとても強い力があると思います。彼女が私にくれた言葉のようにみなさんにも自分を大きく動かしてくれた言葉はありませんか。私が言葉のすごさに気づいたのは運動会のあの日からだと思います。それまでは言葉のことなど何も思っていませんでした。彼女に言葉を贈ってもらったときは、どんなプレゼントを贈ってもらうよりもすばらしい、これまでの人生の中でもとても幸せな瞬間でした。私はまだ約十六年程しか生きていないのでまだ宝物のような言葉には少ししか出会っていないです。これからきっといろいろな場面でいろいろな言葉と出会うと思います。同じように私もいろいろな場面で

多くの人に私の言葉を贈るときが来ると思います。そのとき私が贈る言葉には、きっと私がもらった言葉が大きく影響すると思います。その言葉をもらったとき、自分はどう思ったのか。その思ったことを今後に繋げることができるのか。一つ一つの言葉によって違うと思います。もらった言葉を全部これからの自分に反映できる人などいません。だから、沢山のもらった言葉から選び、その言葉で自分を作っていくことが言葉をもらったときにするべきことだと思います。そうして作っていった自分なら、きっと自分の言葉を贈ることができると思います。これからも沢山の人からの沢山の言葉を大切にして生きていきたいと思います。